

# 「育ての心」で語りあう

～動画を囲んだDX時代のカンファレンス～  
デジタルトランスフォーメーション



「餅を丸める」

## ▶ Vol.3 コミュニティーと心地よさ(下)



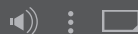
「餅つき3」 「将棋を指す」



この連載では、保育動画を囲んで、保育者、研究者、保護者、子どもに関心のある人、関心のあまりない人、いろんな人が語りあっていきます。

今回のメンバーは5人です。ウッディキッズ（以下、ウッディ）の保育者である溝口義朗さん、平賀努さん。保護者である中村則仁さん、野村幸子さん。そして、研究者である久保健太です。溝口さんは「よっちゃん」とも呼ばれています。中村さんは市議会議員を、野村さんは種苗屋さんをしています。夏号の続きをお届けします。

（構成：久保）



## 「大丈夫だもん」

**久保** ウッディにおいて、子どもたちが居心地の良さを感じながら生活していることの背景には、保護者の皆さんが、園で居心地の良さを感じていることも大きくかわっているように思います。その点については、いかがですか。

**野村** 確かに、保護者である私たちが、園での時間を居心地良く過ごしています。特に感じるのは、保育者さんから親が怒られないという点です。

一回も小言言われたことないです。誰からでもあります（笑）。私ったら、ひどいんですよ。おむつ忘れたり、お布団のシーツ忘れたり。「あー、またやっちゃった」「またやっちゃった」って。連絡帳まで忘れたり（笑）。でも、誰からも何も言われたことないんですよ。「ああ、いいよ、大丈夫、大丈夫」みたいな。

溝口義朗 東京都認証保育所ウッディキッズ。  
中村則仁 あきる野市議会議員。  
久保健太 関東学院大学教育学部専任講師。

平賀 努 東京都認証保育所ウッディキッズ。  
野村幸子 野村植産株式会社。



「餅つき2」



「餅つき1」

溝口 だって実際、大丈夫だもん。(笑)

野村 怒られないって、「こうあるべきだ」って言われてないような感じがして、いいんですよね。

平賀 それは保育者も一緒ですね。ウツディって、人が人として扱われている感じがあるんですよね。なんか、自分のままでいいんだって感じがあります。働いていても。

中村 ウツディの人たちって、保護者も、保育者も、完全に切り替わっていないみたいなのところがあって、すごくいい。もちろん、保育者の人たちは仕事だから切り替えては来るんだらうけど、「もしかしたら、なんか今朝、嫌なことがあったのかなあ」とか、そんな感じのときもあります。

家族でもそうでしようけど、毎日少しの間でも顔を合わせていけば、言葉の端々で、その人の気分がわかるじゃないですか。それがまたいいなあと思っています。

## 人はそれぞれ違う

平賀 ウツディで働いていると、皆に認められることも多くて、自分のままでいいんだっていうことを強く感じます。今は、相手に対しても「その人のままでいいんだ」って思えるようになりました。そのきっかけになったのが、大田先生の話です。

久保 大田先生<sup>注</sup>って、大田堯先生ですか？

平賀 そうです。埼玉大学で行われた大田先生の催しに行かせてもらったときに、「人それぞれ違うんです」という言葉を聞いて、そのことが自分の中のターニングポイントになりました。

それまでは、自分の価値観があって、教育観があって、こういうときはこうでしょっていうのがあったんだけど、その言葉を聞いてからは、「その人はその人でいいじゃん」って思えるようになった。そこからすごく楽に

なって。それが本当にターニングポイントだったんですよね。

### 緊急事態宣言の中で

**平賀** それと、支えあう関係って大事だと思うんです。さつき野村さんが「怒られたことがない」って言ってましたが、私たちも野村さんの家から、カブとか頂いたり、野菜を持ってきていただいたりとかしている。だから僕たちが、保育や違うことで、野村さんに返している。そんな感じなんです。

昨年（2020年）4月の緊急事態宣言のときも、保護者の人が、マスクをウツディの人数分作ってくれたりしたんですよね。そういうのって、物と金のやりとりっていうより、心と心の交換だと思えます。そこには「あなたのために」って思いがあるんじゃないかと思うんですよね。

**久保** そのマスクのエピソードはすごいです

ね。普段から困りあって、助けあってるから、いざ、本当に困ったときに、強いんだ。

### やりたいことをやらせてもらってる

**溝口** 英会話やっていますよとか、体操やっていますよとか、餅つきをして、伝統を教えながら、クッキングまでしますよって。そういった活動を僕らは教育と呼んでいるけれど、それよりも、暮らすことそのものの中で、そこに一緒にいることで、人は育つと思っている。じゃあ、どうやって、やっていくのって考えると、保護者の方にも一緒にやってもらわないとできないんです。それを居心地良くやろうとしているだけ。倉橋惣三は、それを生活って言ったんだと思うんだけど、どうでしょう？

**野村** 「分けない」って言えばいいのか、「つながりもそのままに」っていう感じなのかな。

**中村** 場の設定がうまいなって思っています。鍼

灸をやっている保護者がいて、最近独立してやり始めたから、宣伝しないといけない人がいるのね。僕も仕事上宣伝しないといけないから、お互いにチラシを渡しあって、配りあったりしています。

そういう保護者同士のやりとりも、意図して設定されているのかわからないけど、気持ち良く居させてくれます。親の僕たちが気持ち良く居させてもらっているから、子どもたちも居心地いいんじゃないかな。

**野村** ほんと、やりたいこと、やらせてもらってますよね。保護者が「やりたい」って思うことに対して、受け入れ体制がすごい。自分それって子どもに対してもそうなんだろうなって感じます。

それは女性が社会に進出するために必要なことなんだろうなとも思うし、パン作りたい人はパン作って、皆に提供できる環境をつくってくれているんです。

**久保** 野村さんが野菜を持ち込んだときも、最初に溝口さんに相談したのですか。

**野村** どうだったかな？ あまりにも自然な流れで覚えてない。(笑)

野菜を販売するのは本職ではないんだけど、「できたものを皆で」と思ったときに、ウツデイに持ってくるんです。「食べて、食べて」って。でも、よっちゃん(溝口さん)が「売ればいいじゃん」って言ってくれたのかもしれない(笑)。「お母さんたち、喜ぶと思うよ」って。

**久保** 覚えてないくらい自然だったっていうのがウツデイらしいですね。

**野村** ポイントとしては、皆が出たり入ったりできる場があるってことだと思います。いつも「やりたいことがあったら、どんどん言えばいいじゃん」って言うってくれるんです(笑)。つらい顔しているお母さんがいて、なんか話すきつかけになる場があったほうがいい

いんじゃないかって思ったたら、そのアイデアをすぐ園に言える感じですよ。「言って、よっちゃんえばいいじゃん」って。(笑)

**久保** それが、「野村さんだけズルいー」ってならないことも大事ですよ。

**野村** なるかもしれない(笑)。けど、「じゃあ、他の人もやりたいことをやればいいよ」って、多分よっちゃんなら言うんだと思います。で、パン屋をやるうとか、手先が器用な人が作ったものを売ろうとか。単純な発想が形になるんです。

**中村** 新しい法人形態の協同組合みたいな、なんとなく緩ーく、めちやくちゃ緩ーい感じですよ。ギブとテイクっていうよりは、緩くギブギブみたいな。

### やっばり信頼

**久保** どうして、その緩さが可能なんでしょうか？

**野村** やっばり信頼がありますよね。

昨年のコロナのときもそうですけど、多分よっちゃんの絶対的な「信頼する」っていう姿勢がある。例えば、「あなたは預けていい」「預けちゃだめ」っていうことが一切ない。種屋は自営業だからダメよとか、逆に自営業はいいよとか、どちらも言われてない。

どんな職業だって必要な仕事なんだっていう考えをもってる。その人にとって絶対必要なんだって。勝手な線引きをしない。その信頼感がある。

**久保** そうすると、よっちゃんみたいな園長がいるから、緩さが可能になるっていうことになりますか？

**野村** でも面白いなっていうのが、「よっちゃんがすごい」みたいなふうにも、あんまりなっていないところですよ(笑)。よっちゃんが見ていないと保護者が不安だ、という状況にもなっていないんです。(笑)

中村 そうそう、そうだね。(笑)

僕が面白いと思うのは、ここに来ている保護者の方、割と雑多な感じなんですよ。多分、よっちゃんの保育観とか教育観とか、理念に共感して全員が預けているわけじゃないと思うんですよ(笑)。雑多な人がいるのに、その全部をよしとしているのが、本当にいいなあと。

久保 今日は、コミュニティーとその居心地の良さについて、とても大事な話を聞くことができました。保護者の方が、こんなに気軽に語ってくださるといふ姿も新鮮でした。

この居心地の良さが溝口さんが冒頭(夏号掲載「(上)」参照)に話してくれたような将棋と餅つきの同時進行の土台にあるようにも思います。今日は、ありがとうございました。(2021年1月10日 ウツディキッズにて)

注 (おおた たかし) 教育学者、東京大学名誉教授。

